

## 過去一年間における胎児超音波スクリーニング検査の評価

澤井 千佳 (天理医学技術学校臨床検査学科) , 松下 陽子 , 岡山 幸成 , 山本 慶和  
松尾 収二 (天理よろづ相談所病院)

超音波検査は産科領域の診療に不可欠なものとなっている。天理よろづ相談所病院では3年前より臨床検査技師が胎児超音波スクリーニング検査(以下US)を実施しているが、USが周産期管理にどれだけ寄与しているかを検討したので報告する。

### 【対象および方法】

2003年4月から2004年3月に妊娠後期(28~30週)のUSを行ったうち、カルテ検索が可能であった双胎9件を含む425例を対象に、超音波検査結果を検証した。

### 【結果および考察】

検査実施平均週数は29週1日であった。USの検索項目別に、USと出生後の異常例数を対比した。USで羊水量異常を認めた2例は生後には明らかな異常を認めなかった。胎盤・臍帯異常に関しては一致しないものもあった。これはUSと分娩までの2~3ヶ月の間に状態が変化したためであると考えられる。胎児推定体重異常は8例で、うち5例は子宮内胎児発育遅延を疑い、すべて医師により適切な対応がとられていた。

形態異常の評価については、425例中397例は出生前後の所見は一致していた。このうち有所見は水腎症9例、水頭症1例の計10例で、この他はすべて明らかな異常を認めなかった。出生前後の不一致例のうち、USで異常を認めた14例はおもに腎盂の拡張所見であったが、医師による経過観察がなされていた。また、USでは異常を指摘できなかった14例の内訳は心形態異常6例、四肢・顔面異常7例、水腎症1例であった。いずれも緊急を要するような重篤なものではなかったが、特に心形態評価には胎児の位置や向き、母体側の条件など検査時の画質が大きく影響するため、報告書には画質条件を添えるなどの工夫が必要であると思われる。また、USでの描出が比較的容易な腎盂拡張所見については、胎児・新生児における評価基準が定まっていないことから、不一致例が多かったものと考えられた。

### 【結語】

過去一年間に実施した胎児超音波スクリーニング検査においては、その機能をほぼ果たしていると考えられた。

連絡先：0743-63-5611(内線8989)